報告

当帰四逆加呉茱萸生姜湯の冷え症 に対する効果について

Effect of Toki-shigyaku-ka-goshuu-shokyo-to for Hiesho

岡 進¹⁾ 中嶋 義三²⁾

Susumu OKA¹⁾ Yoshizo NAKAJIMA²⁾

要旨 冷え症24人に対して当帰四逆加呉茱萸生姜湯を投与しその効果を検討した。本剤は苦みが強く7日目までに3人が服用中止したので、21人で効果判定を行った。著効は手と足の両者とも冷感が消失したもので5例、23.8%。有効は手か足の一方の冷感が消失したもので13例、61.9%。著効、有効を合せた有効率は85.7%であった。効果発現時期は平均36日目で最短7日目、最長105日目であった。投与期間は著効例で7.8カ月、有効例で5.8カ月であった。無効例は3例、14.3%であった。効果判定は平均19日目で無効の判定を下し、投与期間は3.6カ月であった。

本剤投与著効例では、まず手の冷感が改善し、ついで足の冷感が改善した。それにともない四肢末端の色調の改善、爪変形の改善がみられた。本剤は「苦み」があり服用しにくいことを訴えるが、効果があれば長期服用もいとわない漢方薬であり、冷え症に対して有用である。

はじめに

冷え症は西洋医学では「独立疾患」としての扱いはなく、不定愁訴の一つとして取り扱われている。しかし冷え症を訴える患者を診察すると手足は冷めたく、夏でも靴下をはいている者や、冬になると手足が冷えると訴える患者が多い。西洋医学では不定愁訴の一症状としての位置づけなので精神安定剤や末梢循環改善剤の投与をおこなうことが多いが、効果的とはいえないのが実状である。

これに対して漢方医学では冷え症は『諸病病源候論』(610年)に寒疝として記載されている¹⁾。漢方では冷え症の治療は得意としている分野である。冷え症の病態は気血水のすべてに関係した疾

患と考えている。このため治療に使用する漢方は気剤、駆瘀血剤、水毒治療剤と広範囲にわたっている^{2) 3)}。したがって適応症の見極めは難しいとされるが、冷え症の患者は虚証の場合が多い。当帰四逆加呉茱萸生姜湯は陰証、虚証、瘀血症で使用されるが、この当帰四逆加呉茱萸生姜湯を冷え症で虚証と思われる患者に投与しその効果を検討した。

方 法

慈恵曽根病院および築山病院での外来患者と入院患者24人に天津当帰四逆加呉茱萸生姜湯{(株)カーヤ} 10.5gを3回に分けて食前に投与した。すべて冷え症を訴え、虚証と思われた症例である。内訳は男性10人、女性14人である。患者の平

1) 2) 医一勤, 1) 高橋病院外科・消化器科, 長崎, 2) 慈恵曽根病院, 福岡

1) 2) M. D., 1) Department of gastro-intestindl Surgery, Takahashi Hospital, Nagasaki, 2) Jikei-Sone Hospital, Fukuoka

表1 冷え症患者と合併症

多発性脳梗塞	7例
高血圧症	4例
糖尿病	4例
レイノー氏病	2例
変形性脊椎症	2例
変形性膝関節症	1例
変形性股関節症	1例
慢性関節リウマチ	1例
下肢静脈炎	1例
慢性動脈閉塞	1例
なし	4例
計	28例 (一部重複)

表2 投与症例有効率

	症例数	%	累計%
著効例	5例	5/21 23.8%	23.8%
有効例	13例	13/21 61.9%	85.7%
無効例	3例	3/21 14.3%	14.3%
判定不能例	3例		

均年齢は男性69歳，女性71歳で全症例の平均は70.5歳であった。

患者背景：患者の冷え症の訴えは強く，手足を触れるとすべての患者で冷めたく感じた。夏でも靴下をはいている患者もいた。高齢で入院期間の長い患者のなかには足の冷え症のため，足先端の色調変化，爪の変化がみられたものもあった。冷え症が原因で入院している患者はいないので合併症は高齢者特有の疾患が多い。合併症は多発性脳梗塞7例，高血圧症，糖尿病4例，レイノー氏病2例，変形性脊椎症2例その他であった（表1）。本剤の投与は短いもので7日間，長いもので19カ月間である。

結 果

判定は著効，有効，無効の三段階で行った。著効は手と足の両者とも触診にて冷感が消失，患者の自覚症状も消失し，満足感が得られたもの。有

表3 効果発現期間

	症例数	効果発現期間	投与期間
著効例	5例	36日(7日～75日)	7.8カ月
有効例	13例	36日(7日～105日)	5.8カ月
無効例	3例	19日(14日～21日)	3.6カ月

表4 著効症例の検討

症 例	合 併 症	併 用 薬	投与期間	発現期間
1. 74歳♀	高血圧症	なし	5カ月	2.5カ月
2. 84歳♀	変形性膝関節症	リマプロスト アルファデクス (オバルモン)	14カ月	7日
3. 65歳♀	なし	なし	1カ月	9日
4. 68歳♂	レイノー氏病 高血圧症	リマプロスト アルファデクス (オバルモン) 塩酸チクロピジン (パナルジン)	12カ月	1カ月
5. 55歳♂	糖尿病	リボPGE ₁ (バルックス)	7カ月	2カ月

効は手と足のいずれか一方の冷感が触診にて消失し，患者の自覚症状は改善したもの。無効は手と足の両者とも触診にて冷感の消失が認められなかったものとした。本剤投与24人のうち3人が投与3日目と7日目で服薬を中止しているので判定不能とし，21人で効果判定を行った。

著効例は21人のうち5例で23.8%。有効例は13例で61.9%。著効，有効を合せた有効率は21例中18例で85.7%であった。無効例は3例あり14.3%であった（表2）。効果発現期間を著効，有効，無効例で検討した。著効例は投与後7日目より効果のあったものから75日目にあったものまで長期におよび，平均36日間であった。投与期間は平均7.8カ月に及んだ。有効例は7日目より効果あったものがもっとも早く，105日目で効果あったものがもっとも遅かった。効果発現日の平均は36日目で著効例と同日数であった。投与期間の平均は5.8カ月であり著効例よりは投与期間は短かっ

表5 無効例・判定不能例の検討

	症 例	合 併 症	併 用 薬	投 与 期 間
無効例	1. 47歳♀	慢性関節リウマチ レイノー氏病	オパルモン パナルジン	8カ月
	2. 60歳♂	多発性脳梗塞 高血圧	なし	2カ月
	3. 96歳♀	多発性脳梗塞	なし	21日
判定不能例	1. 68歳♀	変形性股関節症	ユベラN	7日
	2. 76歳♂	変形性脊椎症	なし	3日
	3. 52歳♀	糖尿病	なし	7日

写真 (症例1)

た。無効例は14日目から21日目の間で無効の判定を下し平均19日目であった。投与期間は平均3.6カ月と短かった(表3)。

本剤は「苦み」が強く服用しにくいことを訴える。本剤を投与し3日目1人、7日目2人の計3人の服用中止例があり判定不能とした。しかし効果があれば長期服用もいとわないことは著効例、有効例に一致して長期服用されていることでわかる。無効例は短期服用で中止したものがあり、本剤の「苦み」も原因と考えられる。

1) 著効症例の検討

著効症例は5例あり女性3人、男性2人である。平均年齢は69.8歳であった。合併症は高血圧2人、糖尿病1人、その他である。併用薬はまずこれらを使用し、効果がないため天津当帰四逆加呉茱萸生姜湯を使用したものである。リマプロス

患者: 65歳 女性

主訴: 四肢冷感

現病歴: 1991年1月7日四肢の冷感を訴え来院
四肢末端は冷めたい。

治療: 1月7日天津当帰四逆加呉茱萸生姜湯投与、1月9日手足の冷感は改善しなかったが、1月16日手の冷感は完全消失し、足は下図のごとく改善した。

図1 (症例2)

トアルファデクス(オパルモン)2例、塩酸クロロピジン(パナルジン)2例、リポPGE₁(パルックス)1例である。効果発現期間は7日および9日と短期間から2.5カ月までの長期間まで幅があった。投与期間は1カ月から14カ月までであり多くは半年以上服用した(表4)。

2) 無効症例、判定不能症例の検討

無効症例は3例あり女性2人、男性1人である。合併症は多発性脳梗塞2人、レイノー氏病1人である。併用薬使用は1人であるレイノー氏病の8カ月服用を除くといずれも短期間服用で中止し、その平均は40日間であった。判定不能症例は3例あり、女性2人、男性1人である。3人とも本剤の「苦み」を訴え7日以内に服用を中止したものである(表5)。

症例1: 84歳女性、体重38kg、身長148cm

主訴: 手足の冷感

現病歴: 両膝変形性膝関節症にて人工関節置換術を受けている。1988年10月右膝人工関節再置換術を受け、リハビリ中であった。1989年10月手足の冷感を訴えた。

現症: 両手、両足は触診にて冷めたく、皮膚は乾燥しており、手足の先端の色調の変化と爪の変形がみられた。足背動脈や橈骨動脈の拍動はよく触れた。肝機能検査では異常なく、一般検血にて軽い貧血があった。

治療：リマプロストアルファデクス（オバルモン）6 T 3 × / 投与開始したが効果なく7日間で中止し天津当帰四逆加呉茱萸生姜湯を投与した。まず手の冷感が3日目に改善し、7日目には足の冷感が消失した。触診にて手足を触れると以前の冷感は消失した。写真は本剤投与前の投与後4ヵ月後の足の写真である。色調の変化と皮膚の乾燥は改善している（写真）。

症例2：65歳女性，体重47kg，身長155cm

主訴：四肢冷感

現病歴：1991年1月7日四肢の冷感を訴え来院

現症：一般検血，肝機能は異常なし，足背動脈，橈骨動脈はよく触れる。触診にて両手両足の末端は冷めたい。皮膚の乾燥，爪の変形などはみられない。

治療：1月7日天津当帰四逆加呉茱萸生姜湯を投与した。1月9日入院，四肢末端部冷感の改善はなかったが，1月16日入院時には手の冷感是完全に消失し，足は図のごとく先端に冷感が残るのみとなった（図1）。

考 察

冷え症とは身体の特定の部位のみをとくに冷めたく感じ耐えがたい場合をいう。部位は腰部がもっとも多く，ついで足部が多い。寒冷期に多く発生する。その発生機転は自律神経失調による血管運動障害であると定義されている。筆者らの症例では手足の冷えがもっとも多く，冷え症が長期におよび手足先端の色調変化，爪の変形がみられるものが半数に認められた。これらの変化は中医診断学⁴⁾では経絡の中寒ということになり，また寒湿を伴っていることになる。治療法は温経散寒を行い，寒湿に対して代湿，利水を配合することになる。当帰四逆加呉茱萸生姜湯は漢方の古典である傷寒論に記載されており，方剤の構成は細辛，桂皮，当帰，白芍，大棗，木通，呉茱萸，生姜よりなっている。当帰，細辛，呉茱萸はいずれも温める作用が強く温経散寒剤であり，木通，呉茱萸

は利水作用がある。本剤投与で有効であった18症例ではまず手の冷感が改善し，ついで足の冷感が改善した。それに伴い四肢末端色調の変化，爪変形の改善がみられた。効果発現期間は有効であった18症例では36日目であったが，無効例では19日目で無効の判定を行っている。判定不能例では7日以内に服用を中止している。これは本剤の「苦み」が原因と考えられるが，効果発現期間を考えると少なくとも30日間は服用するように患者を指導する必要がある。

まとめ

冷え症はよくみかける訴えであるが，西洋薬は効果がない場合が多く，訴えは無視されることが多かった。漢方薬は冷え症に対して効果があり証を合わせれば90%以上の有効率であるという⁵⁾。当帰四逆加呉茱萸生姜湯の証は虚証であるが投与患者はすべて虚証であった。四肢末端の冷え症は温経散寒と利水が必要であるが本剤はその理になっている。本剤は「苦み」があり服用しにくいことを訴えるが効果があれば長期服用もいとわない漢方薬であり，冷え症に対して有用である。

本論文の要旨は第42回日本東洋医学会学術総会（京都1991年6月）にて発表した。

文 献

- 1) 勝田正泰：冷え症の漢方治療概論，現代東洋医学，2巻4号，p.6～10，1981
- 2) 藤平 健：漢方処方類方鑑別便覧，108，1982，リンネ社
- 3) 村田高明：冷え症の漢方治療，現代東洋医学，2巻4号，p.21～27
- 4) 森 雄材：漢方処方の構成と適用—エキス剤による中医診療—，p.76～95，1985，医歯薬出版，東京
- 5) 清水哲也：冷え症の漢方治療，現代東洋医学，11巻2号，p.35～40，1990

(1992年3月24日受付)